



Title	Gallia 61号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2022, 61, p. 125-127
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87605
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卒業論文要旨

ラ・フォンテーヌ『寓話』における自己の尊重

酒井 栞

本稿ではラ・フォンテーヌ『寓話』が「自己重視の生き方」を勧めていると仮定し、土台となったイソップ寓話との相違点、著者自身の生涯や当時の社会との関連を探りつつ、寓話詩に加味された著者独自の人生観、理想の生き方について考察した。

第1章では、本作が他者との関係において自己責任を前提とし、自衛を勧めるとともに対等関係の構築を説いていることを指摘した。金貸しや恩知らずに言及する寓話は軽率な慈心からくる他者への干渉を戒めるものであり、助け合いをテーマとする寓話はそこに打算的思考を認め、各人が「自己」として尊重される対等関係を推奨するものである。こうした傾向から、著者は人間関係において個人の自立を重要視していると結論した。

第2章では、自立の基盤となる自己への理解と信頼を説く寓話詩に着目した。自己以外に頼った者が自力で問題を解決する描写や梃子・ヘラクレス等のアレゴリーは、人間のもつ潜在能力の価値を訴え、宗教に対し懐疑を向けるものと推察する。

また自己理解と現状への満足を促す寓話は、17世紀の危機における処世術の教示であると同時に、人間より「自己の生に集中」できる動物の再評価、動物機

械論への反論でもあると思われる。

第3章では、本作に読み取れる死生観に基づき、ラ・フォンテーヌの理想の生き方と本作に込められた意図を考察した。作中で見られる死の擬人化は人間が死に対し何らかの介入ができることを暗示しており、死の恐怖を認めた上で死に際の潔さを評価する著者の見解を踏まえると、彼が偏に現在享受している生を尊び、carpe diemの思想通り、後悔無きよう日々楽しむことを理想としたことが分かる。彼は『寓話』の全篇を通して人間の弱さだけでなく強さをも示し、個人に眠る可能性を「自己の尊重」によって見出すことを説いた。本作は、日々を懸命に生きる人々に向けた敬意と激励の書である。

ミラン・クンデラ『緩やかさ』における物語の3つの階層

菅野 梨夏

『緩やかさ』は初めてクンデラ自身がフランス語で執筆した小説であり、それまでの7部構成ではなく51の断章によって構成されている。この小説は、18世紀に書かれたドゥソンの小説『明日はない』に対する考察があり、それを現代において再現する20世紀の物語があり、さらにその物語に作家とほぼ同一人物とみなせる語り手とその妻ヴェラが登場人物の一員として介入する、というように、3つの階層をもっている。本論文で

は、この3つの階層がどのように影響しあっているかを考察する。

3つの章はそれぞれの階層に対応する。第1章ではまず、この小説が『明日はない』の単なる模倣ではなく、エピクロスの快楽主義、快楽主義の不可能性を示したラクロの『危険な関係』、現代における自己イメージへの執着という文脈を踏まえた上でのパロディであることを示す。次にドゥノンの小説に登場する若い騎士と彼の分身であるヴァンサンという青年を比較し、騎士が考察対象からクンデラ的「英雄」へと変化する過程をたどる。

第2章ではクンデラ作品において一貫している抒情と叙事の対立という観点から、ヴァンサンについて考察する。彼の師であるポントヴァンが世界を客観的に捉える叙事的な人物であるのに対し、ヴァンサンが世界を主観的にしか見ることのできない叙情的な人物であることが、彼が繰り広げるメタファーに表れている。その一方で、ヴァンサンがただの滑稽な人物にならないような工夫がされていることを示す。

第3章では語り手と妻ヴェラが物語に介入する場面を扱う。彼らの介入は物語の進行を引き止め、小説の主題を明確にしている。それがもっとも顕著になるのが、ヴェラが夫の書く小説のせいで悪夢を見る場面である。ヴェラの語り手に対するまじめであれという忠告は、現代人が冗談を理解できなくなっていることへの皮肉であると同時に、「真に受けない」という小説を読むときの態度を読者に示している。

アンドレ・ブルトン「ナジャ」の心理的分析—シュルレアリスムにおける理想像としてのナジャという女性—

丸山智大

本論では、シュルレアリスム小説として位置付けられる特異な作品「ナジャ」の分析を、ヒロインであるナジャに注目して行った。作品の構造をまず明らかにし、そこから彼女がどのように描かれているか、ブルトン（シュルレアリスト）にとって彼女がどのような存在であったかを考えた。同時にブルトンの他作品についても多く参照し、彼の思想に迫った。

第一部では、シュルレアリストたちにとって大きな意味を持っていた「不可思議」や「驚異」といった概念が、「ナジャ」でも重要な役割を担っていることを明らかにした。ブルトンはナジャの存在を一つの「不可思議」として捉え、彼女を様々な神秘的象徴（メリュージュ、人魚など）になぞらえて表現した。また、「ナジャ」で語られるエピソードではブルトンと他者の出会い（共謀関係）を通じて、その場にはいない未知の第三者の存在が暗示される。彼は、他者との関わりの中で真の自己を探ろうとした。

第二部では、メリュージュ伝説に登場する妖精メリュージュと重ね合わされたナジャについて分析した。彼女（メリュージュ）の下半身は自然界と繋がって超常的な力を使うことができ、その上半身は一般的な女性の姿であった。ナジャは、生粋のシュルレアリストのような特異な能力を持ち、狂気と理性を統合した存在であった。

第三部では、ナジャとブルトンそれぞれが理想とする愛に注目した。ただ一人の理想的女性への愛を探求していたブルトンに、ナジャは排他的かつ相互的な愛の理想を示した。彼にとって最も他者との結び付きを強固にするのが愛であり、ナジャによってその強大な力を再認させられたのである。